

中川根ふる里通信

= 第45号 =

編集・発行・モアラブ中川根
連絡先 テ428-03
静岡県榛原郡中川根町上長尾
859-6
中川根ふる里通信係
TEL 0547-56-0015
郵便振替口座 00870-4-81555

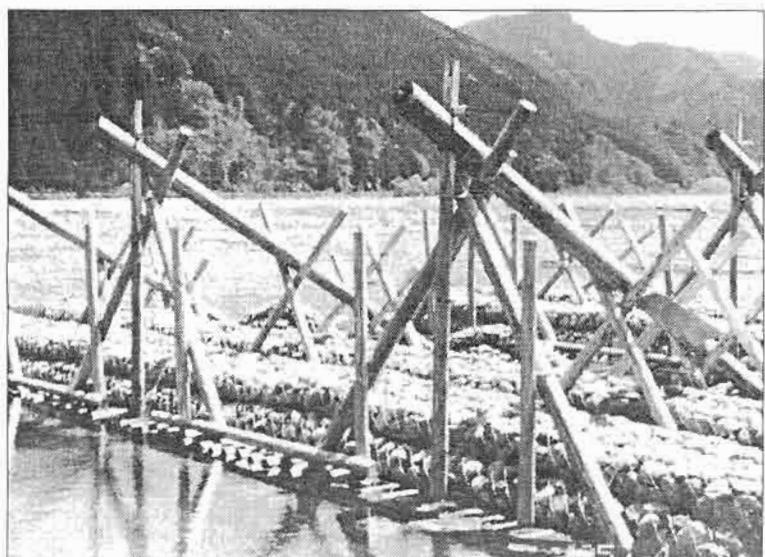


五月雨の

雲ふき落せ大井川芭蕉

6月20日、台風7号による大井川出水
大聖牛流れに敢然と立ち向かう

昔ながらの工法でつくられた
大聖牛が季節外れの台風による
大出水に、左側(前列)一頭は、
飲み込まれましたが、敢然と
立ち向かう姿に感動しました。
写真右は2年前完成後の姿。
テトラポットなど近代護岸との
対比が判るのでしょうか。



特集

未来に残そう その1 豊かな流れの大井川



大井川・南アルプスに源を発し
数えきれないほどの支流(川・沢)
をしたがえ、約一ハロキロメートル。
三ロロロメートル山頂から駿河湾へ
いっせいに下っていきます。

年間降雨量三、四千立方ミリ、緑

豊かな森は酸素を生み、雨を
貯水してくれます。樹木の保水力
はすばらしいものです。少しくら
いの旱魃にもたえず沢に水を
供給してくれます。

上記写真は川根町上空より、
大井川渓に向けて写されたもの
です。鶴山の七曲りの景観がご
覧いただけるものと思います。

大井川中流域とは本川根町か
ら、金谷(五和)付近までをさす
といわれています。それにしても
何と曲りくねった川でしょう。

昔、抜里や家山が大井川であつ
たことも判りますね。抜里の中
心部の小山や家山の天王山は駿
河側の山続いたのでしょ? うか。
野字の池は大井川の三日月湖
です。自然の力の大きさを改めて
感じさせる写真です。

大井川の水が多目的に利用されている事は、皆さんよくご存知のことです。川は個人の所有するものではありません。公共のものです。利用するには水利権を得なければなりません。大井川の場合、島田市鵜絹付近を境に下流は建設者が上流は静岡県が管理しております。

越すに越されぬ大井川、豊かな流れと急流を利用し奥山の山林資源を流した時代が長かった為に、地域の住民にとっては「水利権」という紙によって、大河の水が流れなくなることは予想出来ないことでした。

静岡市井川発、島田市川口まで大井川の流れが導水管の中を流れていることを皆さんほど存知でしょつか。川口発電所からも全て大井川に放水されるわけではありません。これから先は農業用水、工業用水、飲料水と多目的に利用されています。

井川ダムは、それより上流の川の流れを全て堰止めている大型ダムです。真に大井川本流です。大井川本流十、関の沢、寸又川水系、榛原川、境川、その他井川下流、久野脇まで、数々の小川、沢の水を集めた塙郷堰堤。そして毬間川の水が全て導水管の中を流れていったことをご存知でしょうか。



写真

七月十四日夕刻、平谷の
流し焚は水を鎮める
津島神社に向つて発進

と、中部電力や静岡県に訴える住民運動を起しました。
そして塙郷堰堤下流は毎秒五トン（渴水時三トン）、大井川ダムオヌリタム合せて三トン（塙郷堰堤までの放流が河川維持流量として認められたのでした。

あれから早くも八年の歳月が過ぎました。今回より大井川の現況を中心につまづまな角度から紹介して行きたいと思います。

昭和三十年代前半から三十年間、この「水利権」によつて、大井川河床に水が流れなくなつたのです。川に水が流れないこと、何が得られ、何を失なつたのか、その様な基本的な考えは論外にしても、流域住民は昭和六十三年から六十四年（平成元年）にかけて、水利権の更新期が来る、中部電力（旧）大井川発電所・大間発電所・川口発電所に向けて、河床に水を流してほ

8月1日

町営路線バス 『せせらぎ』

運行しております。

藤川、小井平 — 久野脇。

朝7:00 — 19:00まで。

1日5往復、山並みやヤシオ。

川の流れも美しくカラフルだよ。

マイクロバスが走ります。

山の町の交通手段は車。大鉄バスが廃止されて20余年、車に乗れない人達の夢が叶いました。

徳山駅と下泉駅にも止まります。

弱い立場の人にもやさしい心使い(大下医院入口、社会福祉協議会前)も見られ、ほっとした気持ちになりました。利用料金100円



ヘルボップ彗星見えました!

昨年3月に見えた百武彗星に引き続き、今春3月中旬から4月下旬まで夜空を飾った巨大彗星“ヘルボップ彗星”は前評判以上にすばらしい姿を見せてくれました。

特に、3月末から4月始めは天候に恵まれ、太陽に最接近の条件も重なって肉眼でも観察できました。人間の一生の中で、2年も続けて、彗星が見られた、ということも極めて稀なことである様です。太陽系宇宙のはずれの彗星つまり、をまわって、三度、太陽に近づいて来た時、生命の星地球は、どんな進化をたどっているのでしょうか。

話すことばのこと

その1

“方言” “お国訛り” “川根弁”

ふるさとの訛りなつかし

停車場の人込みの中にそを聴きにゆく

入り込みの停車場、東京駅だらうか。啄木のふるさとの國訛りを聴くのはやはり上野駅かも知れない……。テレビの普及により、真に日本語は全国共通となり、古来から脈々と受け継がれて来た各地の話しことは特徴は急速に失われて、いる様に思われます。

今春、アイヌ語が日本語として認められたとの報道を見ました。が、當時者の方々の長年の苦労と、今からで失なわれた言語が修復出来るのだろうか? すでに遅いのでは? と感じた次第です。

又、その時代、人に生まれて来る流行語へはやりことばはさて置き、次々に現われる新しい言語、特に片仮名やアルファベットの省略名詞・専門用語には、とてもついていけないなあとはあきらめの心境も年せいかも知れませんね。

さて、ふる里中川根の話しことも、各地区ごとに違ひをみせ、一つの町内としては、誠に複雑な状況となっております。

中川根は、旧中川根村側に六つの村落(藤川、水川、上長尾、下長尾、久保尾、久野脇村)、旧徳山村側に五つの村落(徳山、田野口、壱町河内、下泉、地名村)、

旧東川根村から編入された文沢地区が四十年ほど前に合併して出来た分散村型集落となっています。町の中央に大井川が流れ、東は駿河の国、西は遠江の国と川が国境。

江戸時代には、橋をかけること、渡舟もままならず、村岸住民の往来は不便の極みであつただろう、と想像するのですが、三津間の佐沢薬師のヒヨンドリの歌には、地名のじん太が来るそづな、川の瀬が鳴る桶が鳴る。と大井川を桶舟“タライ舟”をこいでやって来る姿がありうすし、現在の国道三六二号線沿いに古来より東西を結ぶ街道がいくすじも通っており、そこで水川、正島(徳山)間は、渡舟場もありました。国府道とか、秋葉街道とか呼ばれ、東西文化の接点は大井川、と言われる所以もうなづけるわけです。

- ① キラ地帯(イントネーションが違うなど 全国的に有名)

藤川、徳山、田野口、文沢、壱町河内
 - ② 先祖が長野県から來たと言わ
れている地帯

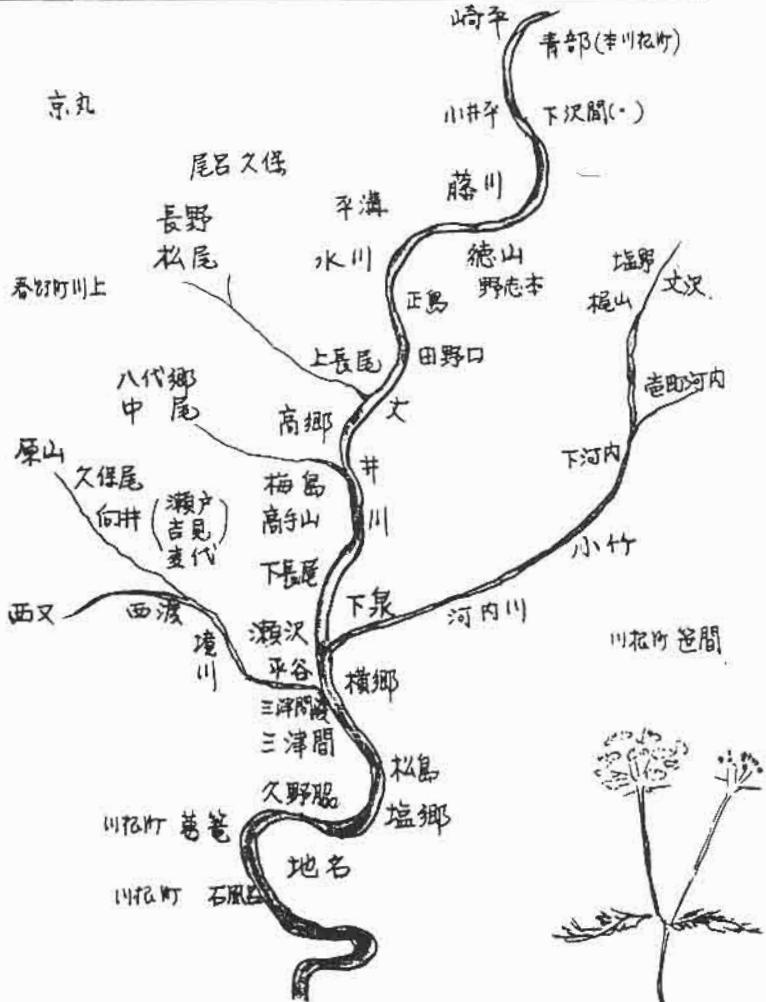
尾久保、長野、松尾、水川
 - ③ 北遠共通のあらっぽい言い
まわし。

久保尾、瀬平、上長尾、八中
高郷、下長尾、三津間、久野脇
 - ④ 南(川根町方面)と類似
する話しお方

地名、地区
 - ⑤ 下泉地区独特の言葉づかい
大変ていねいな話しお方

下泉地区
- 次ページ 地名図参照
(小字名、隣接町一部記入)

五つの地域に分けられると申します。話す人（話せり）が、たんだん少なくて来ます。先代より今、うちに何とかしておきたいと考えた方々により、地名方言集やむかしむかしくのわきなど、地区によつては、独自の収集保存をされてきました。又、町全体の方言集も何度も出版されました。この度、今一度中川根の方言集の見なおしが、中川根町町史研究会で進められておりまして、早ければ、今年度中に冊子が発刊される予定です。会長の河村計三さんの意向は、「東北弁や大阪弁などは将来も残りうる方言だと思われますが、川根弁は近い将来なくなってしまうことは確実だと考えられます。その為にも発刊部数の半分は、二〇五年



まで封印して残しておきたい」と意気込んでおられます。二〇五〇年……それはどの様な時代になるのでしょうか。言葉のタイムカプセル、夢のある仕事ですね。できれば、録音テープも残したいものです。話すことばのことは、これから少しすつ書いて行きたいと思います。特に、①ギラ地帯につきましては次回号でくわしくお知らせする予定です。今回は④の地名の藤田さんより寄稿された地名弁、おしゃべりです。

居酒屋の午後の一刻



四月中旬の或る日、午後四時頃のこと。ポツポツと小雨が降り出でて来た。Aはガラリと居酒屋の戸を開けて入ってきた。

「Aさん、いらっしゃい。」とミイちゃんは豆腐でくりよ。と声を掛け、いつもの場所に席を取りました。Aは「うん、雨ん降つて來たもんて、外の仕事は愛想良く答えて、手早くコップに並々と酒をつき、盆にのせてAの前に置いた。

Aは「うん、雨ん降つて來たもんて、外の仕事はひんやめてチーツと早く來ただけだ。」と言いつつ飲んでコップを盆に置くと、「今年は変わよ一キで、いつんまでも寒くて、おまけに去年の夏はひどい日照りで、茶の木も場所によつては、ひとく枯れたが、山の杉・松でさえ枯れたのが大があるもの」と、唯誰言うともなく、一人言のようにつぶやいた。

ミイちゃんは冷蔵庫から豆腐を半分に切ったのに、ネギと花鰹をのせ、醤油をかけてAの前に置いた。やがてコップが空になると「もう一つ」と注文した。

その内にBとCとが連立つて來た。「A君馬鹿に今日は早いぢゃんか」とBはAに声を掛けた。

「どうせ雨だで外の仕事はいやだし、ここに来る位が今の俺の仕事さ」とB、「うう三人共、足年まで働いた身体だ。ここで少し位飲んだって誰も何とも言わんよ。一寸時間が早いがな」とC。

続けてCが「チイちゃん、うちにもAといっしょで頼むよ」と注文した。ミイちゃんはだまってコップと肴をBとCの前に置いた。

Aが「今年のお茶は何日頃始まるかな? ようきが変ていつんまでも寒いし、うち知らんこんな、五月の連休過ぎになるら」と一人で結論まで出した。

今度はBが「新聞や雑誌でよく地球の温暖化が叫ばれているが、一年やそこらの短期間で言つては筋違いかも知らんが、ふんとすらか。」

引き続いてCが「どこの茶畠を見ても去年の旱害に今年の霜害とで随分ひどい茶園が見られ、収量もあれじや、きっと少いと思うよ。」

「そうでなくともお茶もだんだん採算が悪くなつて來たで、下手あすると肥料代程もない所もあるら」とA。

続いてBが「まあ考へたつて仕方がない。成るようにならぬ、ケセラセラだよ。百姓は何百年も天候と戦つて生活して來したもの、今はたん

とじやないが、年金ちゃう支えもあるし、いまどき、飢える事もないう、こうして晩匂の一ぱいでも良いとせざあえー。」

この発言で本日の一茶前(新茶摘)の話題は一心の結末となつた。

唯、此の家でも先々の事を考へると明るい展望の見える家は、この地区には数える程しかない。勢い酒席での会話も先細りとなるのも否めない事実である。

唯何となく今日明日を力いっぱい努力して後はなり行きませ、と言うのが今日の結論のようである。

編者

三倉廣翁紹介

慶應3年6月20日～

昭和10年9月28日

志太郡豊間村字大平 清水家
に生まれる。明治25年8月3日 三倉仲四郎
家の婿養子となる。明治25年9月 地名小学校
教員となり

・ 34年5月 同校校長職

大正5年12月 「退職」

・ 6年4月 德山村議会

・ 14年4月 講員となり、2期つゝめる。

志太郡德山村地名誌

編者 三倉廣翁

藤田 正義

翁は、常に教育の振興に努め、学校施設の改善充実に或は時代の進展を幻灯映画会で紹介し、亦、蓄音器による音楽観賞を教え、且、名士を招いて講演会を催して、時局の変化を教える等、村民の教養の向上に力を注いた。

特に青年の夜学を奨励して、青年の教育指導に尽力する等々、私財を投じてこれらの事業を進めた。

翁は漢籍に造詣深く、談興すれば口々として語り、その語りは続いたといふ。山田節氏著、川根の方言集より

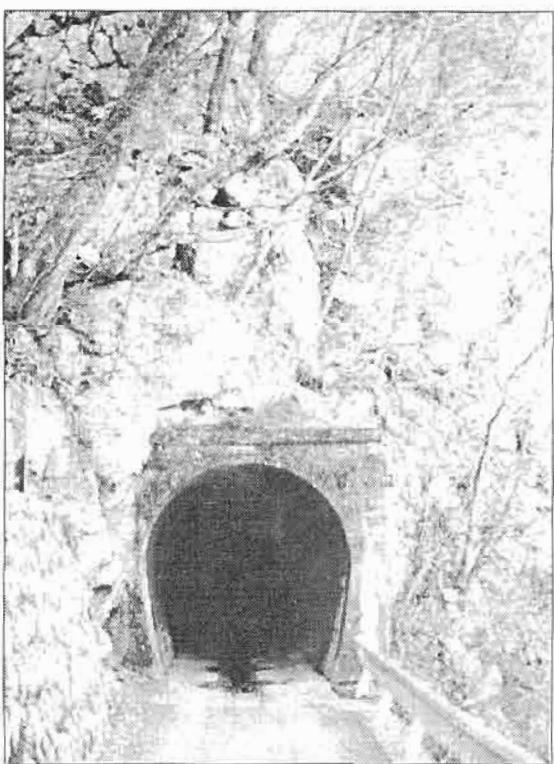
トンネル(隧道)の想い出

山間にとつてトンネルは必要不可欠の交通手段です。トンネルや橋の開通により川根路も次第くに距離感を短縮しつつあることは嬉しい限りです。特に感心なのは、千頭以北の道路事情の変貌です。

私は、小学校二年生迄、本川根町に居住していましたが、山間特有のトンネルやつり橋が多く、当時は大事な生活道路の一部でした。今では車の普及によりトンネルを歩いて通ることは珍らしい事ですし、仮に歩いて通ったとしても照明は明るく、専用歩道が設けられているのが普通でしょう。

話は半世紀前に遡りますが、本川根町奥泉地区へ向う手前は、森林鉄道の軌道(線路)が生活道路と共にありました。そこには数百メートルのトンネルが二本あり、それを通らなければ奥泉に行けない、という代物でした。

トンネルを通ることは唯でさえ薄意味悪いのに加え、そこまでは惡条件が重つていきました。一日数回は上り下りの列車が通るので、トンネル内でいつ出食わすか判らないのです。トンネル内は勿論、傍に歩道らしきものを設けてあるのですが、列車が入ってくる時鳴らす汽笛や、凄じい振動と騒音で精神的にパニック状態になることさえありました。天上には10~20メートル位間隔で薄明るい白熱電球が取り付けられて



寸又川上流、千頭営林署森林
軌道は専用道路に改修され、
トンネルは利用されています。

又、今でも鮮明に憶えていますが、村落運動会の帰り、大勢乗ったトロッコ列車が、力不足でトンネル内で立往生し、大人の人達が降りて後押しました

ことがあります。



冬の森林軌道のトンネル

静岡市在住

西田 享司



木材を積んだ井川線

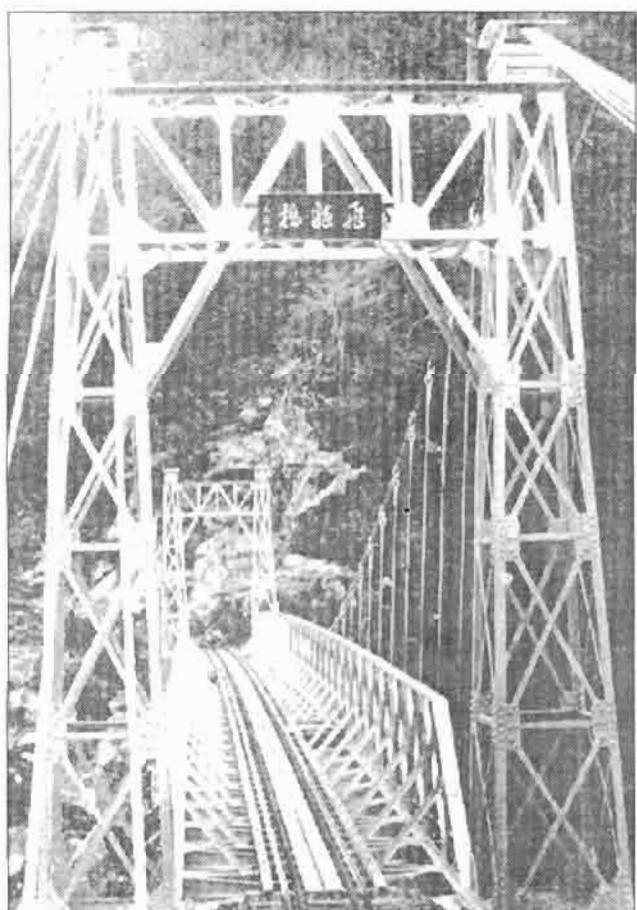


上 千頭駅発車前の井川線

下 千頭発 井川行 川根大橋下付近

余談になりますが、現在私の住んでいます地区に、人命を保障しないと云われる隣町と結ぶ農道用の一キロメートル近い直線のトンネルがあります。私も何回ご利用いたことがあります。北海道のトンネル事故があつてから、全くその気にならなくなりました。又この昔を偲びつつ、何事もなかったことにホッとします。奥泉から徳山まで、私の子供時代は裕に一日を要したのが、今では車で一時間もあれば往復できます。昔の人達が悪条件に耐えながら生活していく姿の一端を振り返り若者達が思い知つていただくのも意義があろうかと存じます。

兎角、今の便利さを感嘆する一方で、自分に寄る年波を感じずにはおれません。



寸又峡のシンボル・初代飛龍橋
昭和9年ごろの写真

東京のかたすみから (18)

テレビの始めから終りまで

お笑い四方山話』その三』

“さすが中国・熱烈歓迎された佐伯主任”

渡邊 實夫

あの権力闘争の激しい中国で、三度失脚して再び副主席になつた鄧小平は、華国鋒国家主席の実権を奪い、君臨していたが、日中國交回復二十五周年を迎えた今年二月九日、九二歳で死去した。

それで思い出すのは、時の総理大臣大平正芳氏に隨行して中国を報道取材した、テレビ朝日の佐伯啓二主任の話である。彼は羽田空港に帰着すると直行して私の部署へ報告に来た。不慣れな中国出張の疲れも見せず、中国広播電子台（北京放送）の歓迎晩餐会が北京大飯店で行われた時の模様を、元気な声で語ってくれた。「中国側の一番偉い高官（主席）の隣りが私の席だったんですよ。同行した他のテレビ局の部長、副部長、課長クラスは、ずっと下座の方だったんだけど」と、どうして？と聞くと、「とにかく、中国では行く先々でテレビ朝日報道現業部主任、佐伯啓二の名刺を出すと、熱烈歓迎してくれて國賓、なみの特別扱いをしてくれたんです」という。鄧小平副主席と華国鋒主席が改革・解放路線を推し進めていた中国へ、田中角栄総理大臣の日中國交正常化のことである。今から十八年前の昭和五四年十二月三日から九日間、日中文化協定締結、借款供与の問題処理など訪中のあとをついで、大平正芳総理大臣が訪問した時のことである。



を含む軽い儀礼的なものであったが。

日本側のテレビ放送の取材は、中国側の強い要請により、共同取材が条件で、在京テレビ局から夫々専門の技術屋が選ばれた。私の部署からは、前述の佐伯啓二君が参加したのである。

北京の受け入れ体制は、打合わせをきっちりすれば、との通り良くやってくれた。（左写真は佐伯主任「中央」の作業中のものである。）

彼の任務である、日本へ映像を送る衛星通信の準備も目途がつき、一息ついたところで、最年少の佐伯主任を中心としたかと思われるような盛大な歓迎の宴席をひらいてくれたそうだ。

当時中国で国家主席といえは最高の地位であり、最

高の権力者であった。テレビ朝日報道現業部主任の佐伯啓二さんも最高実力者とみられたか？ 漢字の国のこと、主任さんも主席同等とみてくれたのであろう。野暮を承知で説明を加えると、テレビ朝日の職制では一般職員から役職になる第一歩が主任であり、入社十年目位で与えられる地位である。



扇書と席順について笑い話をもう一つ。派閥抗争が激しかった日本教育テレビ(テレビ朝日)の創立者でもある赤尾好夫会長(旺文社社長)、大川博社長(東映社長)時代のこと。

東映のヤクザ映画・娯楽映画製作大川氏と、芸雪時代をはじめ教育・受験図書などを出版し、セネカ哲学信奉者でもあつた赤尾氏とが、お互に気が合おうとは誰も思わなかつたが、社を挙げてのある儀式で、大川派閥会長、社長の席順を逆にしたらしい。激怒した赤尾派との対決は決定的なものとなり、時の総理大臣佐藤栄作氏のお出でで決着がつき、大川氏が失脚して収まつたと、業界紙は報じた。

テレビ局にこのような派閥抗争が起ころのは、テレビの一つのチャンネルの免許に対して何百というテレビ局開設の申請希望がでた場合、監督官庁である郵政省は、党利党略や関係議員の票田稼ぎの運動にも押されて、整理・統合が出来ないまま、十羽ひとからげにして一つのテレビ局として免許を与えるからである。

ちなみに、日本教育テレビの場合も、一つのチャンネルをめぐって映画社・出版・印刷・ラジオ・新聞・証券各社や私鉄などから申請が出て、免許獲得競争は熾烈をきわめた。時の政権(郵政省)は苦慮の末、中心的役割をして、いた旺文社・日本経済新聞・東映・東京タイムスの四グループを一纏めにて免許を与えたのである。

結婚相談室をやつている関係で、最近、時々、結婚式が近づいたカップルから「披露宴の座席表づくりは止めました。出席者の職場内や親戚間でもめる事がありますから」と聞かされている。



関東地区中川根会 第3回「故郷を想う会」

4月6日開催予定があいにくの雨天にて中止となりました。

当日上京しておりました関係で、一度新宿御園を見てみたいと思っておりましたので、足をはこんでみました。

おりしも、桜満開すばらしいの一言でした。千駄ヶ谷駅付近JRのうす暗いガードで、同郷の鈴木のぶ子さん・中野淳子さん(旧姓)にお会って、しばし談笑、こちらも楽しい思い出となりました。

ふるさと夜話

漬物いろいろ

原田耕作



「老人は死んで下さい國のため」
これは今川柳界でちょっと物議を醸している時事
川柳について、私がふるさと夜話を書こうと思つて
いる日の朝配達された新聞の読者欄に出てゐる言葉です。

老人は國の為になろうと思つたら死ぬ事だ、とす
つと以前から私も考えていることです。しかし如何
に國の為とは言え自分から死を選ぶことはむずか
しいことです。福祉行政に無策な政治家の第一番に
考えそうな川柳の言葉ですが政治家だけでは無く
老人を邪魔とするすべての人達がこの川柳と同じことを
考えているものと思われます。

「國の為になる日は近い少し待て」

これは近頃の私の心境ですが、八十七歳になつて、随分躰も頭も衰えたがまた生きています。今後何回ふる里通信へ原稿を送る、ことが出来るか予測は出来ないが、じい引つ込め、と言う声が耳にはいるまで書けたら幸せと思いつつ、ペンをとっています。今日の夜話は冒頭の文句とはがらり變った漬物談議です。



「いとけなき日の忘れざる思ひ出は塙に漬けたるすかんばの味」
いたどりの味は何か少年の日の悲しみをふくんでいた思いがします。今もって忘れられない味です。
次に幼い日の忘れない漬物の味は澤庵と梅干です。
小学校一年生の時最初の弁当のおかずは澤庵でした。
貧しい家の私はもちろん友達も殆ど弁当のおかずは澤庵か梅干でした。しようと梅干の酸味で瀬戸引きの弁当箱に穴があきました。弁当の御飯は家族みんなで食べる麦飯を炊く釜の片隅へ米を少しまさめて入れて炊いてくれたので麦の匂いのする御飯でした。それにおかずは梅干か澤庵、今思えばかなりますしい弁当でした。

澤庵と梅干で育てられたためか私は澤庵と梅干が今でも大好物です。しようと梅干は子供の頃の穴あいた瀬戸引き弁当箱をいつも思い出させてくれましたが、現今市販の梅干にはじつにうまものがあります。先日息子の友達数人が来て、ビールのつまみに二パック食べてしまいました。ビールのつまみに梅干、世の中も変つたが、梅干も變つた。ひとつそりと握飯の中へはつて遠足のお供をするだけの時代ではないのです。人間はいかが出来るかとキラわれ、邪魔者扱いされるが、梅干はしづかに出来てから好かれる幸せな漬物ですネ。

農家のどこの家にもあって珍しくない作物だが、これを漬物といた家は殆ど無いであろうと思われる物に甘味(にんにく)とハツ頭(やつだらう)の芋柄(いもね)の

押漬があります。蒜は茎葉を、芋柄は生の物へ塙を振って重石をする。好奇心のある方は是非やってみてその珍味を楽しんでみて下さい。

現代は実にいろいろな漬物が現れて、漬物でも飽食の時代、何がほんとに美味しいか判らない程であるが私は素朴な漬物に心が引かれます。

處で現今、千種萬種の漬物が現れたが、困った漬物もできてきました。それは医薬品に依る人間のぐすり漬、農業に依る作物のぐすり漬、このくすり漬は最近見なされ改善されつつあるが、近頃また茶園の肥料漬、という言葉が新聞紙上にも、人の口の端にものぼる様になつてきました。

茶園近くの山林から(沢から)水を引いた池では、昨年あたりから魚類がすっかり死んでしまった家があります。新聞に依ると肥料を半分に減らせという土地もあります。作物に依つては化学肥料をやればやる程、香氣も味も悪くなる、といふことを身にしみて知る時代が來た様な気がします。

今回は漬物のいろいろと題して思ひ出の漬物、珍しい漬物、困った漬物について書きましたが、次回は昔を偲ばせた立派だった智満寺の七十余年前の花鉢、五十年前の井川竜泉院の托鉢について記憶をぶりしほって書いてみた、と思います。

然し冒頭の川柳の文句通りになつてしまえばおしまいですが。可々。

(ふるさと夜話 第十八夜 終り)



4月13日(日) 第2回
ふる里 ウォーク

好天の中、下泉駄、下長尾、瀬波、平谷、三津間、久野脇、塙郷着のふる里ウォーカーは、原田耕作様宅にてお話を聞いたり、ゆるいはたで昼食を食べたり、春の樂しい1日となりました。
第3回は、10月26日(日)を予定しております。



講義が終って、愛車に乗って、平谷方面を案内して下さる原田さん。流し焚や、はたるの説明も伺いました。

定期購読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部 テ共 150円

皆様の定期購読がふる里通信の発行を
支えます。年間4回の発行(季刊誌)を
予定しております。今回で購読の切れる方
初めてふる里通信をご覧になられる方には
郵便振替用紙を同封致しますから
引き続きご購読をお願いします。

年間予約 600円 (150円×4回)のご送金
をおすすめします。

購読を止めたい時や住所変更のおりも
是非ご連絡下さい。

郵便払込通知票 00870-4-81556

加入者名 中川根ふる里通信係

ふる里通信に関する問い合わせ先・及

発行責任者 テ428-03

静岡県榛原郡中川根町上長尾859-6



三ヶ月に一度の通信が四ヶ月と間があいてしま
いました。時が春から夏へ足早にすきてしまつ
た感じです。今年は季節のめぐりが早いのでし
ょうか。六月に台風上陸、七月初め梅雨前線が
北に上がり、早めの夏の太陽が照りつけたのも
つかの間、台風がらみの大雨が降り、夏の太平洋
高気圧も元気がありませんね。早くも空は秋の
雲、やはり季節のめぐりが早いのか知れません。
ご迷惑をおかけしきりですが、四十六号、近いうち
に発刊させていただきます。よろしくお願ひ
申し上げます。

今年の一一番茶、霜害も旱魃もなくほとほとの収穫量
もあり、緑茶ブームに乗って明るい話題が多いのでは
と期待しましたが、今一お茶産業は元気があり
ません。何故でしょう。茶摘みも機械化、茶工場も大
型化、労働時間と労力はずい分改善されたのですが、
従事者の高齢化、先が見えない農業とお茶をとり
まく環境もきびしい時代になって来たことを感じま
した。

小 次 節 子

TEL 0547-56-0015



大変なことかも知れませんが、生産農家も自分で販
売する事を考える時代が來た様に感じます。

今回号より特集を二つ組みました。大井川の
現況報告、方言、と何号で完了するか?
書く方も樂しみにしております。
ご意見・寄稿お待ちしております。

先日、既刊号に目をやりましたが、下手な文章
字体を反省しましたが、十二年の重みも改め
て感じた次第です。石の上にも三年、目標は
十号、二百人の会員が今では八百人、発行部
数も千部になりました。これまで続けて来
れたのも皆様の温かいご支援があったからと
感謝しております。まず五十号を目指し
ます。

購読者名簿は町外購読者のみとさせて
いたとき、今回が最終回となりました。
名簿公開で支障はなかったと思いますが
いかがでしたでしょうか。何かの役に立てたら
うれしいです。